

## 「生命のメッセージ展」を開催して

長岡 昇汰

「生命のメッセージ展 in 桐生」これが私が人生で初めて主催者となったイベントのタイトルだ。「生命のメッセージ展」とは、犯罪や事故、いじめ、医療過誤、イッキ飲ませなど理不尽な行為によって尊い命を奪われた犠牲者が主役のアート展。犠牲者一人ひとりの等身大の人型パネルを作り、本人の写真や家族のメッ



セージを掲げ、足元には、生前愛用していた靴が置かれる。私はこの夏、メッセンジャーと呼ばれる犠牲者達のオブジェ、135体を地元桐生市に迎えた。笑顔の写真が、一人ひとりに大切な時間があったことを思わせる。遺族が記した、ありのままの気持ちが詰まったメッセージに、その笑顔があまりにも理不尽な形で奪われたことを物語る。使い古された靴が、確かにそこに、その人が生きていたことを感じさせる。写真と目を合わせる、メッセージを読む、遺品に目を通す。その一連の動作を経て、見る人は悲惨な事件や事故の事態を目の当たりにするとともに、命の尊さをしっかりと考えていく。犠牲者の命と向き合うことが、結果として自らの命を見つめることになるのだろう。昨年七月に前橋市の会場でこの展示を見た私は、ひとつひとつのオブジェから発せられる強いメッセージに衝撃を受けるとともに、今までにないほど強く心を動かされるのを感じた。その後、桐生で起きた高校生暴行死事件を受け、仲間たちとともに、命の尊さを伝えようと、地元での開催を申し出た。犯罪被害や事故に遭った経験はないが、事件の当事者と同世代が開催することで、若い人たちと同じ目線から伝えられることがあるのでは、と考えたからだ。

高校生だけの手で初の開催、地元メディアや支援者の方はこぞってこの活動を取り上げてくれた。休日や夏休みには時間を作り、広報や資金集めのために仲間と一緒に告知用のパネルや募金箱を抱えて街へと飛び出した。積極的な活動と、多くの人の支援の甲斐あって、三日間の会期中におよそ千人もの人たちが足を運んでくれた。会場で真剣にオブジェと向き合う人の中には、自分たちと同じ高校生の姿もあった。こうして同世代が会場に足

を運んでくれることが何より嬉しかった。被害者の写真から、遺族のメッセージから、遺された靴から、彼らは何を思うのか、それをどう受け止めてくれるのか。この問いが、この一年私の頭から消えることはなかったのである。



遺品や事故の被害者などという言葉

を聞いて、どんなイメージを持つだろうか。ひどく抽象的だが、多くの人が「重い」とか「暗い」「悲しい」といったイメージを抱くだろう。とりわけ若い世代にはその傾向がある。私だって同じだ。重苦しい気持ちにならずに、明るく楽しいイベントと同じ気持ちで開催できた訳ではない。周囲の人たちに上手く伝わらないことにいらだちを覚えたことや、大切な人を失った悲しみと向き合いながら、命の尊さを伝えようと参加する遺族の人たちと、どう関わっていけばいいのか、悩み続けたこともあった。高校生たちで何ができるのか。何の経験もない自分の言葉には、周囲の人たちを納得させるような迫力などないのだろう。そう思うとひたすら悔しくなり、涙があふれた。しかし、彼らの靴を手に取り、声なきメッセージに耳を傾けるたび、生きてくても生きられなかった人たちの無念を感じ、同じような被害者が一人でも減るように彼らの思いを伝えねばと思った。彼らの身に起きたことは、私たちの身にも決して起こりえないことではないのだ。重く暗いイメージとメッセージから受ける強い衝撃の先に、「命は大切だ」という誰にでも伝わるメッセージと大きな感動があるのだ。それを、

多くの同世代に感じてほしい。



昼下がりの会場には、天井近くの窓から、外の暑さを物語る夏の陽射しが差し込んだ。明るい日の光に照らされて、白い人型のオブジェが、くっきりと浮かび上がる。午前中から、絶えない来場者の中には、食い入るようにメッセージに目を走らせる人や、しゃがんで遺品を見つめる

人、参加遺族の方と言葉を交わす人の姿も見られる。突然にして、理不尽に命を奪われた人たちの生きた証しを、ゆっくりと、しっかりと胸に刻んでゆく。失われた命の尊さに触れたとき、その命が、今まさに自らの胸の内にあるのだと気づく。この命を守らねば。大切に生きなければ。目頭を押さえていた手が、そっと胸の前へと下りてきて、鼓動の聞こえるあたりでゆっくりと止まった。命の輝きが、受け継がれた瞬間だ。見る人の心に、声なき声が、生命のメッセージが、しっかりと届いたのだ。あとは、その気持ちを外の世界へと持ち帰ってくればよいのだ。今度は自らの命を見つめ、大切にし、更には身近な人の命を思い、大切に作る気持ちが生まれる。そうして少しでも命を見つめる輪が、広がれば良いと思う。



真剣にオブジェと向き合う人の姿に感動していた時、背後から一人の来場者に声をかけられた。振り向くとそこには、リュックサックを背負った学生服の男子高校生が立っていた。

「こういうことを自分で考えて、迷わず実行できるなんて、すごいですね。」

彼は、市内に住んでいて新聞でこの展示を知り駆けつけてくれたこと、将来は検察官として被害者を守りたいということ、会場で感じた命の尊さをこれから大切にしたいということなどを語ってくれ、最後に会場で綴った手紙まで残してくれた。

会場となった建物の外で彼を見送った。折り返して玄関へ戻ろうとした時、気になって彼が渡してくれた手紙に目を通した。

「あなた方の生命のメッセージ・・・絶対に無駄にはしません。」

私の胸に、これまで経験してきた様々な苦しさや寂しさがよみがえってきた。それと同時に、それらはすべてこの日のためにあったのだと思った。私の思いが、伝わったのだ。犠牲者たちの生命のメッセージに乗せて、私の思いが、彼に伝わったのだ。あとは、その気持ちを大事にしてくれれば良かった。達成感でもなく、込み上げる嬉しさでもなく、目標を失った時の喪失感でも、自分に急に自信がついた訳でもない、今までに経験したことのない感覚が私を満たしていた。